

教 仁 名 聞

第 101 号
(発行日)

2019 年 2 月 1 日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 6638113 西宮市
甲子園口 2 丁目 7-20
電話・FAX (0798)
63-4488

(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈聞名の会〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

真の生きがいとはなに

のちを落とした顛末を見ると、そこに問題を感じたのである。

というのは、映

先日、たまたま NHK のテレビを見ていたら、「自撮りの登山家」のことを放映していた。栗城という若い(おそろく三十歳前後)登山家がエベレストに一人で登頂を目指して失敗し崖から転落して死亡したという、そのことに関しての番組であった。彼は五大陸などの有名な高い山を一人で登頂したのだが、他の登山家と違った点は、その登頂プロセスを自撮りしてネットに配信するという極めて現代的な点であった。

それが話題になり、彼を応援する人たちができ、スポンサーもついて資金も得、今回もその資金でエベレスト単独登頂に挑んだのであった。エベレストには今まで七回アタックしたが失敗し今回が八度目であったが、これも失敗してとうとう崖から転落していのちを落としたのである。この放映を見ていて、彼のやってきたことは「すごいなあ」と思うとともに、そこに

何かモヤモヤするものを感じたのである。なぜモヤモヤしたのか。それは番組の中で、彼が登山を自撮りするようになったそもそものきっかけを語ったことと関係があった。

彼が登山をするようになったのは、大学生になるかならないかの頃、「自分は何のため生きていくのかさっぱりわからない」「自分は何なのか」「なぜ生きねばならないのか」ということに苦しんだというのである。そして無気力になり、毎日家にこもり空しくたまらなかつたという。

それが大学生の時、たまたま山岳部に入って、山に登るようになった。そしてそれを自撮りしてネットで配信したところ、多くの反応があり、応援をしてくれる人たちがふえて、それによって、彼は生きがいを感じるようになったのである。これが彼にとって大きな生きがいとなり、生きる力になっていった。それは結構なことであるが、彼が若くしてい

像の中で、彼は十本の指がすべて凍傷で半分になっていたこともあるし、彼が最後にエベレストに一人で登頂する際の状態が誰が見ても無謀としかいえない状態に登って行ったことである。単独であつただけでなく、その時の彼の体調は風邪をひいて思わしくない上に、登頂ルートが非常に困難なルートをあえて選んで登つたことである。

おそらく彼はもうここで死んでも良いというような悲壮な気持ちで登っていったのだと思う。要するに自殺行為としか見えないような形で登つたのである。思いとどまれなくて突っ込んでいく、そういう感じである。

今回彼のことを取り上げたのは、こういう「熱中」なり「はまり込む」なり「突っ込む」というようなことは、よく人にあることで決して希なことではない。たまたま彼の場合は登山で自撮りをするという特異さから注目されたの

である。

今まで空しくて元気がなかった者がたまたま出遇った事によって生きがいを見出し、それに熱中する、いわば入れ込むということ、それはよくあることである。それによって何等かの成績なり業績なりを上げて誉められる場合もあれば、それによって生活が破綻し、破綻しただけではなくて周りの人たちを困らせてしまふということもある。

一流のミュージシャンとか画家の人生を聞くと、はまり込んで熱中してきた人が多い。その一方で競馬競輪などの賭け事、バイクの暴走、ストーカー行為などにはまり込んで、自らの生活が破綻してしまう場合もある。

その外にも、政治的なグループに入つて過激な闘争に熱中するということもあつて、その場合ややもすると社会の平穩を乱すことにもなる。

こういう極端なものだけでなく、ゲームに熱中し食事の時間も惜しんでそれにはまり込む、そういう若者が多いと聞く。近年、ことに一日中スマホに向かいゲームに熱中している青少年を多く見かける。ゲームであるから目に見える害は少ないかも知れないが、

限られた人生の時間が非生産的なことに多くの時間を費やしていると思うと、損失が大きいと思うのはヤボであろうか。

なぜ過熱し、突っ走り、熱中し、時には自分をコントロールできなくなってしまうかねないのか。

それは「生きがい」とか「生きる意味」とか「生きていく実感」をどこに見出すかという点が大きなポイントであると思う。

この世の何か一つの特殊なことに生きがいや生きる意味を見つけると、それに執着し、過熱し、そこに重心がかかり過ぎて、それに「溺れていく」ことになりかねない。それが良い業績なり成功なりにいく場合もあるが、そうでないと問題が出て来る。

一つのこと熱中する場合、もし他者に邪魔をされたり、お金を使い果たしたり、病気になるってできなくなったりすると、そこに憤懣や憎しみや絶望が起る。

そういうこの世の特殊なところがなく、だれでもすでに与えられており、それによって生きがいを感じ生きる力にもなる、そういう普遍的な

真実まことにふれる、これが大事ではなからうか。この世の中の特殊なことがらではなく、普遍的な、だれでもいつでもどこでもすであたえられていて、そういう真実まことにであうことが大切と思う。

何かをしていなければ空虚であり、している間は充実を感じるといような、そういう事柄への熱中は、ややもするとそれ以外のことには無関心になったり、それをするごとに邪魔が入ると怒りや憎しみが起こり、出費がかさんで経済的な破綻にもなりかねない。

特別なことをしなくても、平凡な生活の中に充実を感じ、そこに静かな情熱もわく。そのような生活であり人生が与えられるような真実に出遇うことが大事だと思う。

ただ普遍的な真実ということになると宗教の領域にもなってくるが、宗教が生きがいを与えると言っても、そこには注意しなければならぬことがある。

普遍的な真理に基づかない何か特殊な宗教教義に熱中して閉鎖集団に加わり、それが過熱して社会的に問題にもなるという場合がしばしばある。

いわゆるカルト問題である。その信仰は狂信的にもなり、その集団以外の誰の意見も聞かなくなる。

その場合の信仰は普遍的な真理に触れるのではなく、特殊な教義を無批判に信じ込み、他者にも強制するようになる。宗教とは教えを通じて普遍的な真実に触れ、それによって寧ろ人間の狭い主義主張を超えた広い世界に出るのである。

ところが特殊な教義の中にはまり込むと、そこに閉鎖されて他の人々や外の社会との間に壁を作ってしまう独善的になって、自由な人との交わりや話し合いができなくなる。宗教による生きがいの回復であるかを冷静によく知っておかねばならないと思う。

(了)

お便り

(T・K様からのお便り)

* * *

専修念佛。六日のご縁で、新しくお越しになった方の質問によって、先生の御心、念

佛を申しつつ、そのいわれを聞き、尋ねていくことがまっすぐな道だと思い、原始真宗を自分も尋ねている、ということも直接伺い、有難く思いました。

念佛を申し、耳に聞く、ということとは非常に容易なことでありますが、ここに阿弥陀佛のおはたらき、大悲が籠もり、今、至り届いて下さっている、と知らされることは非常に困難なことであります。

それは如来のはたらきに原因があるのではなく、全く自分の思い計らい、おそらくは慢心によって、如来のはたらきを受け入れることができなかつたのだろうと察します。どうしても、自分が助かるために、あるいは何かのために、念佛を申し助かろうとする、念佛あるいは余行を振り向けて助かろうとする、こういう有様を雑行雑修自力の心と仰られたのだと推測いたします。

しかし、ひとたび如来の御心が至り届いてくださったならば、そのおはたらきに抵抗することは不可能であり、無碍光のお徳が間断なくはたらいてくださり、念佛にまでなつて喚びかけて下さります。

自分は、煩惱あるいは自己信

頼から離れることはできませんが、汝を必ず往生させずばおかない、と仰り、念佛にまで成つてくださった如来の大悲、本当にかたじけなく、有難く存じます。念佛を申させて、聞かせて、信じさせ、往生させ、成佛せしめる、そのすべてのはたらきを本願力と仰られるのであります。

無量寿佛の御名を持って、の御心とは、汝の心や有様に囚われず、常に称えつつ聞けよ、であると教えて頂いております。故に、ただ称えよ、の仰せに帰すこと、ただ称えつつ、本願のいわれを聞き続けることが念佛往生の道ではないか、と思っております。

自分の心がどう思おうと、思えるとき、思えないときがあるようなものにはや用事はありません。八万四千の教えがあつても、すべて間に合わないこんなもののために、無量寿佛の御名を持ってよ、とお釈迦様は仰られている、先生はお勧めになつてくださる。故に自分はもはやただ称えよの仰せに帰し、念佛を聞かせて頂いているだけなのであります。

(了)

眞実信心うるひとは

(和讃問答)

眞実信心うるひとは

すなわち定聚のかずにいる不退のくらいにいりぬればかならず滅度にいたらしむ

(浄土和讃)

現代語訳 (眞実信心を得た人は、浄土に生まれ成仏することと間違ひなく定まった人々の仲間入りをする。それは不退の位ともいわれる。この世で不退の位に定まった人は、必ず最高のさとりである滅度に至らせてくださるのである。第十一願の意)

*

N 「眞実信心うるひとは」の信心をうる、とは」

D 「アミダ仏の本願を信じることですが、本願を信じる心は私たちには起こせません。それゆえアミダ仏は本願を信じる信心を与えて下さる、それによって本願を信じる事ができるのです」

N 「本願を信じる信心をいただいた人は定聚の数に入る、といわれるのですが、定聚の

数とは」

D 「定聚とは浄土に生まれることの定まった人たちのことです。そういう人たちの仲間に入るといわれるのです」

N 「本願を信じるとなぜ定聚に入ることができのでしょうか」

D 「本願を信じると、この世でアミダ仏にであつて、アミダ仏に摂め取られます。アミダ仏に摂められた人はアミダ仏の働きに一つになることが定まるからだといえましょう」

N 「アミダ仏の本願を信じるとなぜアミダ仏に摂め取られるのですか」

D 「アミダ仏の本願、すなわち(我、汝を救う、我にまかせよ)とのアミダ仏の仰せに順う、それはおのずからアミダ仏に自らを引き渡すことになりす。それが信心の内容です。そうするとアミダ仏の大悲のいのちにだきとられ、アミダ仏のいのちのふところ住まいをさせていただけるのです」

N 「もはやアミダ仏と離れなくなるのですね」

D 「アミダ仏と離れなくなるのですが、その場合、アミダ仏が主であり、私は客です。アミダ仏が主体となつて下さるのです。そういう人はアミダ仏の量りなき大悲のいのちの一つになることに定まった人であり、それが定聚の数に入る、ということですよ」

N 「大悲のいのちとおっしゃいますが、普通いふ(いのち)と違うのですか」

D 「普通いわれるいのちは、アミダ(無量)のいのちそのものを更に对象的に限定してとらえられたいのちです。いわゆる人の肉体のいのちとか、虫のいのちとか、いわゆる大自然の生命とかいう場合のいのちで、それは私たちが对象的に捉えているいのちです。対象化された客観的ないのちです。それは大悲のいのちを更に人間の主観において限定されたいのちです」

N 「難しいですね」

D 「ええ、私たちが一般に言っているいのちは、私たちが对象的に考えている生物学的物質的ないのちであつて、対象化されたいのちです。そういういのちのもとにある対象化されない、主観と客観と分かれる前のいのちそのもの、このいのちには大悲の功德があ

りますので(大悲のいのち)といえましょう。知る私も知られる大自然のいのちも、この大悲のいのちに於て現れたものです」

N 「そういう大悲のいのちをアミダ仏といわれるのですね」

D 「ええそうです」

N 「こうしたアミダ仏のいのちにどうしたらであえるのですか」

D 「アミダ仏は南無阿弥陀仏の名において私たちにであつて下さいます。このアミダ仏の名を聞くことによつてです」

N 「ただ南無阿弥陀仏の名を聞くだけですか」

D 「南無阿弥陀仏の名において阿弥陀仏の誓いを聞くのです」

N 「どういう誓いですか」

D 「(助からぬ、どうしてみよもない汝をまるまる引き受ける、助ける)とのお誓いであり、そのお心を聞かせて頂くのです」

N 「この大悲のお心を聞くのですね」

D 「聞くのですが、この誓いを(助からぬこんな私のため)と受け取ること、聞き受けることを(聞く)といふのです」

N 「聞くことが信じることなのです」

D 「ええそうです。そうなのですが、自分の力では信じられないのです。お聞かせ下さる大悲のお心が私に響いてきて不思議にも信ぜずにはおれなくなるのです。大悲至りて信心となつてくださるのです」

N 「アミダ仏の(助ける)という大悲が届いてくださるのです」

D 「ええそうです。ただ、(助ける)が届くのは助からぬ私ということが知らされているこの身においてです。救い無き我が身を知らされ、そこに阿弥陀仏の底抜けのお助けが感じられるのです」

N 「助からぬ身であるとして分かるのですか」

D 「自分の反省ぐらいでは分かりません。助からぬ者を助けるといわれる阿弥陀仏が私をどう見ておられ、どのように助けようとされているかを聞かせて頂くことによつて知らされてくるのです」

N 「(助からぬ者を助ける)と仰せ下さることによつて、我が身は助からぬものであると知らされるのです」

D 「ええそうです。助からぬ者と知らされ、そんな者を助けて下さる阿弥陀仏の大悲が知らされるのです。一つのこ

とです」

N 「では次に、〈不退のくらいにいらぬれば かならず滅度にいたらしむ〉とは」

D 「この不退の位とは、二度と迷いの境涯に退転しない、後戻りしない、そういうステ

ージのことで、それを不退の位といいます。それは先ほどの定聚と同じステージです。

こうした不退の位に入ると必ず滅度という大いなるサトリを得る、いわば仏になるといわれるのです。滅度とは別名涅槃のことで、仏のおサトリのことです」

N 「いつ滅度に至るのですか」

D 「この世のいのちが終わった時、いわゆる臨終の時です」

N 「この世のいのちがある間は滅度には至らないのですね。どうしてですか」

D 「いかにアミダ仏に離れなくなっても、煩惱の染みついた身心を伴っている限り煩惱が起こってきます。欲や瞋りや愚かさが起こってきます。いわゆる夜が明けても厚い雲や霧に取り囲まれて青空が見えないのと同じで、信心を頂いてアミダ仏に出遇っても、太陽は見えなくて厚い雲や霧に覆われているようなものです。ただ、雲や霧に覆われて

いても、太陽は雲霧の下まで照らしていただくから、暗くはありません。闇夜ではありません」

N 「そうすると臨終の時は雲霧が晴れて一面の青空が現れるように浄土が顕現するのですね」

D 「ええそういいと思います。『歎異抄』にも

弥陀の願船に乗じて、生死の苦海をわたり、報土のきしにつきぬるものならば、煩惱の黒雲はやくはれ、法性の覺月すみやかにあらわれて

といわれています。雲が晴れてサトリの月が現れて下さる、それが滅度でしょう。このご和讃はアミダ仏の第十一願のお心を歌にされたものです」

N 「十一願とは」

D 「大無量寿経に

たとい我、仏を得んに、国の中人天、定聚に住し必ず滅度に至らずんば、正覺を取らじ。

とあります。定聚に住したものは、必ず滅度という涅槃のサトリを成就せしめたいというアミダ仏の誓い입니다。この誓いによって、信心の人はこの世を終えた時、サトリを成就し仏にならしていただけるのです」

(了)

松並念仏語録を味わう

○岐阜へ詣らせて頂きました。

御縁が終つて或る師、「あなた、信心は如何ですか」と、「私、信心はありません。南無阿弥

陀仏 南無阿弥陀仏。師は「あなたの信は盲信です。」「それではあなた様は解信ですか」

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

(松並語録より)

*

人間(凡夫)の側で起こす

信心は盲信か解信かどちらかしかない。盲信というのは「イワシの頭も信心から」といわれるような、訳は分からないが素朴に信じる信心です。あの神様や仏様に願い事をすれば商売繁盛するとか病気が治るなどという信心で、なぜそんなのか理屈や道理は分からないが盲目的に信じる信心を盲信という。一方、道理や訳を聞いて理解し納得して信じる信心を解信という。これは宗教だけでなく、日常生活でも一般に「信頼する」のはこの解信である。

弥陀の本願を信じる信心は外から見ると盲信と思われかねないが、盲信ではなく不可思議な大悲が人間の心に届い

をはじめは分からぬままに称えながら、お念仏に現れている大悲のお心を聞く。それが念仏聞法である。

て、おのずから本願のお心に信順する信心である。それゆえその信心は不可思議な信心であるが、同時に「気がつく」「目覚める」という意義が伴う。しかもこの信心は壊れない。しかるに人間の側の盲信も解信も凡夫の心であるからいつでもこわれる可能性がある。

○念仏者は、「わけ」が判らぬまま念仏して居ても終りには、辻褄が合う。法義者は道理が判つても終りには、辻褄が合わぬ、わからなくなる。

(松並語録より)

*

アミダ仏の救いは不可思議な大悲の働きであつて、私たちの納得とか理解を超えた有難いお助けである。そのお助けがすでに私に働きかけている。それがお念仏として現れているのである。そのお念仏

〈変更のお知らせ〉

三月六日(聞名の会)を三月八日に

変更致します。時刻は同じく午後七時から。

